



特別
~5
6089
4





紫子菴句藻

春之部

改正

高橋文庫

宮本氏
之文庫

春来

生海苔のわらわらめりけに初を院

まら院殿より仁王のよのわら

え月わ何わりのまらり

初老の旦

誰ら舞のまらりるは初ら

元日やまの草履のかり捌
 双足の履きよりの曉
 鐘の音のほろりたる物
 今朝はふゆたき人鏡草
 吉頭巾烏帽子お捨よるたのま
 朝鮮人よ来聘の
 ささけ長唐土船一日の恵

雑春

雪の臺所かきも蒸菜木那
 物ゆり七種くわ下男
 短板くさ道具の舞
 早もく梅
 綿織の二袖の寒と梅花
 脇行しよふ敵れ梅も
 じふふてさるるるるるる

佗人の風俗ふむかひのた

厠上吟

窓の梅内うら騒がしき

蜘蛛の巣まゆめくもむも梅花

わの目所川昌都家内

鎌倉の神宮大友向果日正別家

昌長とくちやし合子清彦叔別

夜蘭とくちやし合子清彦叔別

予とくちやし合子清彦叔別

教とくちやし合子清彦叔別

あつとくちやし合子清彦叔別

梅あつとくちやし合子清彦叔別

水色

川とくちやし合子清彦叔別

紹巴法橋

法華のつとくちやし合子清彦叔別

雲の跡~~~~~
 わさつ~~~~~
 西國橋のの腰
 茶屋の行か~~~~~
 油鶏~~~~~
 白~~~~~
 山~~~~~
 山~~~~~

道~~~~~
 雲の跡~~~~~
 山~~~~~
 山~~~~~
 山~~~~~
 山~~~~~
 山~~~~~
 山~~~~~
 山~~~~~
 山~~~~~
 山~~~~~
 山~~~~~

上巳

燈火の雅かゝるも斗也
雅地〜〜〜の姿布
花

い〜ゆのれお馬帽をかぬ織は見備
春び〜のいよほり〜

春山暮色

この日あつらひの種は〜〜後
つ〜食一日〜を食ふ耶

木のり〜あ〜

花不點各〜當座は〜心

〜ゆあ〜の〜の梢〜

〜あ〜徳〜花山子晒〜

後江戸八白顔巻頭

〜花を捨〜花〜^復而大各

夜半風雨奔西施

声〜〜〜心様

大膽お落座のくつろ蹄うら

暮春 二句

廣賣声も紅也川せひ

ほろろ(皂角の芽も何所

行まらうらうら人見ぬ鳥

画賛

約脊のうらうら

惜しうらうら

紫子菴白藻

春来

夏之部

あらうの贈はくん更衣

三月その夜を長柄亭の情ん

この旦くふさ道すく更衣の

式まいつくく葉つれ

次ふと馬上にけし給う柳

根の露もくく若葉外

辨わく畧 卯しこ

くろ朝辭人と衝きり
けききしれも音るはきり
洞室の湯ホも音るしり子視
産頭の坊ハも音る月が都云
泣きしり 泣る

杜宇トウしりれの音も伊集り多
の秋アキも音る村も音る

灯トウしりちの音も音るしり
やききしり人の音も音る子
蚊モも音るあつちの音も音る

隱題

落れしりちの音も音る隅
美中ミナトの音も音るの音も音る
江上五月雨

あ舟の音も音るあつちの音も音る

連日晴るるを

木下川に流るる水はつるる夕陽

懐回家路

早苗田馬の律あかや月夜

端午

惟もあつきの空をみる夜

よ

何果の家は福徳の懺う南

わがあまののののの曲輪

母の

竹舟の見える日や葉の目

一

響

ふつと心ゆくわが力うね

掬よれは雲もあはる流か那

~~~~~



都のしらぬ西の空をわたり

河津の周を踏むり雲の影

夏日のさうきに

蝉啼わ松のうわさる声のま

葉柳ふさふさもれり涼のこゑ

夕まきやあみのわくしけ涼し啼

夜の蝉一口声のうらうら

くれ竹の庭おむきふ敷き

新さのこ

浪よく牧屋と浴する月夜

風や海と月の宵標の燈のしら

昌郁宗近お片くさく福一俳諧の

余の尿をわらもれぬあし

眼前の一樹

下岡の柳を照らす空の月

膝をこわく略す



貧乏行

いづらも鹽ふき火を焚じ  
暗く後

曉の國へ白雨繁く中へ即

扇面

馬より後より車より

夕なれ人も一俵馬の

温良恭謙讓の心より後より

柳の

羅おしりさる人の

柳橋の川より後より

いづらも鹽ふき火を焚じ

暗く後

曉の國へ白雨繁く中へ即

扇面

馬より後より車より

夕なれ人も一俵馬の

温良恭謙讓の心より後より

柳の



勝つゝと船のゆきもせむし  
人待たれ

三膳くしりくきけりる因の卯  
虫何しわださるまも二折安

路傍

新玉片し節かみ飼ふ暑有り

夏中立秋の處

多涼しひしり秋を蚊をのこら

紫子菴句藻

秋之部

立秋

春采

綿綿おとくし力か今朝の秋  
起よ今即桔梗の中ゆりもん  
種とらわ火取らるの覆りく  
秋さして日板も二葉あはれ  
三日月とあせしく落るる二葉外



乞巧 甲子の夜  
あはれいづれい

待ち待ひの股大根あまの川  
さし齧のまやも夢夜もあつ昨  
いづるいづれ銀河は白く流る夜  
りあはれい西風のかげひせとて

とある観上より西へ青松禪林の  
一灯とあつて見ゆ

われらも声も樹回の燈は

きりきり索駒よしる音とて  
稲妻や無信の谷は門下の外  
いふはあつてさけき聲は門田外  
あはれい西風のかげひせとて  
あつて

まはれい灯籠の房は秋の風  
あつての夜はあつて躍る如  
あつての朝も月の子は南







大橋の石を遷

海と入る波の音は月見の

四月のうららかな銀床風

月をいかに

新月を舞をらるる宵の

天へ

月黙と静けさをかきこみ

落月

伏櫛も朝飯後なる月見小

丁とて供みの秋 記有畧

もるあやゆさを静かに秋のあ

専澄り水樓に謹す

とくは花掃ふ夜月を

ゆるや波のそよぶそよぶ

ゆ灯も天井低し雨夜の戸

小田の倉町家のこころを



一夜を寝りか儘し

初ノや尾灯のまゝお座るお女  
咽声か貝代とくくんとは鳥

田家こと

ゆい居ぬ杖やさうらうら後  
疥癬やまよとせしやうらむ

山行

赤い実の石帯してゐる山路外

重陽

菊のや九日大根の葉もめくる  
推してゆくところぬ海の氣を  
くわのわくわくとれ菊の舟  
南部へく始くめされもふ  
菊のやや繪の同くの八日の奥

偶居こと

さくさくも島の奥のよめれ隅



出づ持じくしのあおさくの花

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~の腹とぬんるまの花

~~~~~

~~~~~と霜おぬけさく柿の艶

后月

垢離取の亭川戸あわく十三夜

梅~~~~~

~~~~~の端錦とわらわらま葉の思

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~



兼の年と白のくみたる山路  
深更又深更のくみたる山路  
麻の題ありて傳ふる山路  
新しき木刀もくみたる山路  
酒船のくみたる山路  
かみたる山路

まじりて白のくみたる山路  
乙世仲秋

良夜馬行 辨わらるる

月と酒をくみたる馬  
くみたる馬  
くみたる馬  
くみたる馬  
くみたる馬  
くみたる馬



紫子菴句藻

冬之部

春来

汝の鳥辺りてくさくさ神月  
 大鳥のよれんけしり小鳥の  
 初めを春戸へは別る谷の声  
 傘のくさくさ海はわしぐれ  
 ぬのよきく濃くする酒よきの花  
 閑下夜話即更



蠟燭の光るる音のしるは時雨  
土黒く降る時雨の日は  
堂宇の鏡古く落葉の形  
焚炭のまじりてのまじりて  
鳴るる音のしるは時雨  
多他たまた第一のしるは時雨  
自性

短板のしるは時雨

解家かいけのしるは時雨

靴けのしるは時雨

市聲

音音のしるは時雨

鴨のしるは時雨

鳥のしるは時雨

夷浪士の車くるまのしるは時雨



一夜寝をせしむる合はる  
たのむるにまじりて大御所  
御もまじりて御の冬を交  
輪はふらむとてんらふ  
片はけの舟かきつるに  
朝をぬらぬのたをれ侍馬  
御打の御身がしる霜は  
懸けおまゝの友か駕り

連書

馬方城の官の奉る月  
たのむるにまじりて御の  
藤原の御所はまじりて  
御もまじりて御の冬を交  
輪はふらむとてんらふ  
片はけの舟かきつるに  
朝をぬらぬのたをれ侍馬  
御打の御身がしる霜は  
懸けおまゝの友か駕り



後雪のゆかり口取草履取  
くろ雪のしほきと家に繪の紙  
紙の雪お国よりくろく  
灯のゆかり獲見のしほきの雪  
このゆかり極夜の雪  
月帰く雪おれくく古衣  
道ゆく人の雪  
ゆかりを顔のゆかりに  
ゆかりを顔のゆかりに

庭前

先接心竹之化か夜の雪

障子

ゆかりの雪を踏む音おのこ  
ゆかりの雪を踏む音おのこ  
寒きとけりの眼前に上白雪  
くろ雪のゆかりに銀世界  
くろ雪のゆかりに銀世界



寒夜三句

星海を衝きつて夜は夜を  
移すものも入る夜は川鳥  
水鏡おとこの下で啼らるる  
あはれ

あはれをたづねては神香姫  
そふれのも母を消す冬  
はあ田川に

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

歳晚

あはれ



徳まゝとてかゝるも  
 時酒や今宵三百六十盃  
 色くは愁も消しくは  
 家ころいゝ〜年々平の暮  
 梅探る門松探るに  
 月雪のよきものけし所

目次

春來

獨詠

神祇

釋教

戀

無常

哀傷

騎旅

述懷

懷旧

祝



神祇之部

春来

元日ハ拂くぬ迄の櫻ノ卯

りつの一しおまきし初冬のもろ

新川も光院太神宮お詣り

感得のしりり紫

あつた有の一字の世神月

會津兼載天神社法樂

まじし子お酸いよの好く毒花

麻鳴詣

柏のふさりの維も谷きん

下總安波社頭奉納

楠のくしこしむさふ神の長

両部習合

初年の兎お看こまきし日と

豫念懐り思ひく



いもーいもーいもーいもーいもー

釋教し部

春來

照見五蘊皆空のころそ

釋女村もささく部と風巾

山門酒は白ふき菜が

賢寒山拾得の繪

掃制しそ拾ふりのり夏の日

達と會ら唐松やこし鳥の居



蓮華のや油揚の椿くさん

あゝ時僧のいふと拒む

佛のいふとぬ念もや河豚汁

お鮎ふ具のいふとあつち

ヒイニフウニフンタニタルハヨルモヒルモ  
アカイツキシカニフリリスミイタイカ  
コトカ

あゝ神も我を達とて頭巾

十唱句合ノ内ニ 午寂老人

寒のけと撞木の膝とあゝ音

と風伝白の油見れい布さう卯 春來

白馬入 蘆花しらゆくと

明日の侍も徳あゝまゝく



戀之部

春來

木下濃列云くつりあ寄梅と

あはれも梅のまゝさくら

堪ゆさくら

あはれも梅のまゝさくら

せんさくら

あはれも梅のまゝさくら

川風さくら

あはれも梅のまゝさくら

あはれも梅のまゝさくら

あはれも梅のまゝさくら

あはれも梅のまゝさくら

あはれも梅のまゝさくら

あはれも梅のまゝさくら

あはれも梅のまゝさくら



あゝん  
飛ぶ

あゝん  
後のお出さん

無常之部

春來

飼猫う掻ふとわらわら

猫の園火一口お冷ひてくら

朝のほや一輪のいでら用ふ

靴けやうて命い入かくろ

延享三丙寅年二月十六日春來卒  
年齡四十九安名義山道智上座







まの御法師の母のつらみかたのつらみ  
きりぎりすのつらみ  
昌都宗道

あまのつらみはなつかしき草

青島稚女の母のつらみはなつかしき草

まのつらみはなつかしき草

片佐  
公其園

まのつらみはなつかしき草

亡母悼

老母未期之時禪巖和尚有一回

谷町大英即如眠

松の上牧とてなつかしき草のつらみ  
印

亡母悼

まのつらみはなつかしき草



羈旅之部

春來

四反松峯岳所へ赴くこと  
 解くや君を海とも日躑躅  
 醫師古國をくくたる海  
 秀くもまわりくくくくく  
 聲帯くく  
 細川公河首途を見くくく  
 がつくくくく今や松鼓の花の時

西行の種くくくくく  
 門生溜北くくくくく  
 錦くくくくく  
 くくくくくくくくく  
 くくくくくくくくく  
 くくくくくくくくく  
 くくくくくくくくく  
 くくくくくくくくく



鏡持のまゝを盃かゝる

行徳村の御酒は此の御酒に似たり

とて止るはつゝのよき酒の音

ありしはこれの酒の音なり

推敲くわぬ御酒の音なり

宿根おほくもこの酒の音なり

又もまじりて清き酒の音なり

なるは酒の音なり

小見と思ひぬく途中の吟

今朝の酒の音なり

長真七上

笠の輝きまじりて酒の音なり

とて酒の音なり

とて酒の音なり

もつと御酒の音なり

とて酒の音なり



は度身しつらうしつらう海道の男女  
ゆき宙様とふ縁勝のしつらうしつらう  
の洒掃しつらうしつらうしつらう  
立しつらうしつらうしつらうしつらう  
大いしつらうしつらうしつらうしつらう  
六帆しつらうしつらうしつらうしつらう  
高しつらうしつらうしつらうしつらう  
砂しつらうしつらうしつらうしつらう松

下畧

鎌倉に往く由  
かみしつらうしつらうしつらうしつらう青砥藤巻  
いしつらうしつらうしつらうしつらう  
み底しつらうしつらうしつらうしつらう  
顔色  
岡守の煙と煙と火とらふ  
駿介のむしつらうしつらうしつらうしつらう風土の







贊 明人 仲和 花押土畧之

巨嶂後層鎮海涯  
枝葉堪作上天梯  
岩寒六月常留雪  
靛似青蓮直過溪  
名利雲連清建古  
虛堂塵遠老禪栖  
乘風吾欲東遊去  
特到松原竊羽衣

清心何處在  
清心何處在  
清心何處在

眼前之筑波

人  
人  
人



述懐之部

春來

後よりきく日

山の露のらるる〜おわりの葉の  
いづれ躍舞よわらむの世捨人  
靈柩〜あ〜は是れわらぬ  
谷月の影〜丸〜お〜  
月見れに水端お取らぬ〜

本居お退後の時

う〜の牧おま〜せ〜らひぬゆ

〜

愛お〜す〜らぬの牡丹う南

獨居

徒〜らぬ〜か〜く炭の音  
〜ら〜ら〜ら〜と〜さ〜ら〜ら〜ら  
〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら



病中しのひくとき時

面見をわがれにお科よのあつる合

奥いとも人の同まのむ後子う那

印くく世排職の者とも理唐しる

くものくくくくく

たろくくくくくくくくく

懐旧之部

春來

甲寅の秋の比川崎甲申氏の寺へ

入してはるふお古人東漸の全路塚を

訪るはるくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

屋のあつるくくくくくくく

路よりくくくくくくくくく







三周

往きの平生とばかり

山系にたつ佛のぬらりのまはり

七周

霜のふりかへるまじり業の

十二回懐感

縁のつらみぬめをのり枯の霜

十七回

偶然と〜〜十七年一忙然と

〜〜十七年昔時師没しり時

予廿三歳今日も〜〜既

白とも小弾指の光陰と

獨念

我も亦月雪先の塚のゆき

多伴亡父と十と回法會の

〜〜まじり



親行くとある人の志行す叩

とくみきくくく廻る愛帯 柔仲

本國勢州下箕田産

亡父前田姓菅原喜重入道淨清

寶永乙酉年九月五日卒行年五十五歳

丁巳季秋正當三十三回追福之并祭文 畧

黙菴青巖

淨泣九拜

美忠の志のしんくなく音

古こののたかむる遠くも可あ

小也砧母こもあつらひあ

丙寅のしんくあむらりし

母うたふあふしんくあむらりし

七のしんくあむらりしあむらりし

七父の志のしんくあむらりし

あむらりしあむらりしあむらりし







四季發句

李井菴存義

夜のこゝろわさる掛一民のま  
柁檀ふ二筋むも初ととこ  
何ととと一か一唄へ若菜摘  
かゝるは年暮るかゝる啼泣か  
小僧すけぬ麻のたると郭と  
子規まゝの里かゝる躑躅



夕月西に爰に霞の影を  
あつたてしむる

人さすかたしむる  
馬蹄今も昔も  
あつたてしむる  
福妻くしむる  
新月也見屋の  
あつたてしむる

まのこころの情を  
糸の音は舟の  
一色に踏ん  
子と抱く  
亭の葉は  
炭取おわる  
落葉  
就授



雪ふ入る洞なわらき深冬を  
 寒い前く清くも蛸のみの色  
 前くしらわらわ火桶の接ふ  
 雪ふ入る洞なわらき深冬を  
 寒い前く清くも蛸のみの色  
 前くしらわらわ火桶の接ふ  
 雪ふ入る洞なわらき深冬を  
 寒い前く清くも蛸のみの色  
 前くしらわらわ火桶の接ふ

四季巻句

権道采仲

春あけや明けと下都の初対面  
 春あけと明けはあけとる旦の卯

春あけと明けはあけとる旦の卯  
 春あけと明けはあけとる旦の卯  
 春あけと明けはあけとる旦の卯

川上のお年まはる川の一と  
 川上のお年まはる川の一と  
 川上のお年まはる川の一と



まはるもあまのあまの味  
りいさくも縞子の妻おほ子の半  
流石と柳おほくおひて那  
後江戸八百韻  
かきと女御の部ひらからり  
~~~~~  
け横もくもる田舎の部一
ふくらおほの煙も月雨

當麻 車僧 二白

陣のい復あゆみま〜ん
光るももる車も〜ん
はあ〜んあ〜んあ〜んあ〜ん
ら〜んの〜んあ〜んあ〜んあ〜ん
朝もあ〜んあ〜んあ〜んあ〜ん
こね〜んあ〜んあ〜んあ〜ん
あ〜んあ〜んあ〜んあ〜んあ〜ん

新居

五穀の今宵は月の影と響く
蟬のなきる夜は月を霜
かきおとす風はうらたに
初霜の影も不動の丘に
まつたの師走も一や
箱入り山吹の前も一の
紙

四季発句

時菴渭北

百姓のわらわる日あり初層
声の夜の鳥もさう炭
梅の香は伏櫛もつて
梅の香は伏櫛もつて
梅の香は伏櫛もつて
柳の葉もさう吉井の
さき抱くらん花の

夏日雨國橋下お掉く
まぶ露一ふもさだま
の鳥啼くや鴉胡眉の霜
撞ぬ鐘つく音も月雨
空のあり響も人か
あ梨の水も満くまよの月
高灯の夜も露のゆり
一年箱根早雲寺か請し

宗祇師教雨老人の雨碑ふじふ
更か葉く露時雨
口印や麻下下大和尚
到誰家
まぶ露一ふもさだま

春之部

巖戸の如鑑の音をた今朝の去 云奴
 板橋の如きのしとまのしとの去 曲言
 八木代しよよ東流の如く今春 調鳳
 見せぬふ麒麟もかむ御代の去 立志
 くらげの如く年式渡りまふの去 相 詞和
 伊豆の同場の如き有り松より 幽山

柳の女さうらを移り切 米山
 わらわらわらうらみ成振る唐 雲卿
 寒声のきひのしや 曉月 臺簫
 しの鳥ふかきうらまき 梅花 可圭
 盗しれんふらや 猫まゑ 甘棠子
 香をけう道のしるを梅を友 夢天
 具まゝい人の月かき着葉の 水路
 野梅さく知る人わらわら道 況水子

うらわらわら梅の花 其用
 ト駄こゝろきりし知ぬ梅は 蝦守
 七種ハ人の心ろ青き柳 万幸
 仁のるる柳ありそふ小魚柳 横雪堂 柳車
 田んぼふまきふくひわ梅ど 松羅
 青柳の影を佃代り 向岸 且厚
 老にさししる見かき梅む 百太
 鳥馬の中お柳りまらし柳 半里

當り繪かすつねねくろきり
上法武村 壽林
 野も山もみみあつた蛙う叩
松韻
 うつひけい先く蛙のりき音
法白井 兼曉
 とんぼのまを吸く力石 兼膏
 春雨の軍まねく霧の撞 兼壺
 梅の香のまをい花屋まろり也 松陰
 福られぬ右きりくろり三人根 長柄
 諸人も松の敷きく 梅の心 兼軒

法をいまきくまらの成る柳の柳 龍眠
 一寸くまきくまきく舞(落のまき) 兼也
 初平や青のまきくまき屋の下迄 青郊
 くろ年の布衣まきく兼 兼助
 初平や日の入るま林といく心 竹尾
兼香折
 むし二千一暮石も白く梅のりく 白清
兼光改
 兼平と鳥帽子親する暇う旬 壽來
三井曉鏡
 兼風か海へりく次鐘の声 冲尚

紅梅のよも下の名をいそふる 采郁
紅梅の鳥さきの端 巨洲
當にたふふ同けや古今集 龍眠
初平のよもその中乃らら山 百宇
當乃ららそのくの谷 習く
くくくくくくくくくくくく 紫傘
敵 同く 隔や 梅 障 春里
くくくくくくくくくくくく 畔李

曲のわも物流さるまされ 青洲
水さささささささささささ 沾路
蝶のわもささささささささ 万字
ささささささささささささ 心色
ささささささささささささ 潜魚
鳴りくくくくくくくくくく 采婦
ぬも野さささささささささ 青屋
日のりくくくくくくくくく 千里子

心常しよやし山う春雪の 銭丁
ゆきまきこ入ふらわわ梅の卯 花雀
花ちるし一態谷まのふ散りの 芭江
新見し一貫しう借れ櫻う旬 仙魚
白雲の回しく一眉のあここ 其風
えたらあまの深し心しう層 素夫
あまの目のおしよま色く櫻う卯 珪賀
酒臭し入ふ酔あまやうらろ梅 三千観 芽宇

黒翫賣らうの陰ふ体し 祖 調和
かししやりの女のと午の助一松
きわむけテ草履し海と波と交ト尺
わりし蓬や凡わうらるる花の山 嵐雪
けふ津しとわ梅の目もん桂 凡鳥
行まや止つらしれく谷ま藤 春潮子
杖と人み花を細うを息し卯 沾古
よし吉らんし 三千観 藤の棚 正友

背へんを煮るふしをの斤量 古 山夕
 山夕を煮るふしをの音 我樂
 けり酒樂錦く所をさく 寸夕
 其のる天のけりしき体と 調古
 月影の森のやうにけり 木共改 独活の角 黙齋
 壺不悔一くんのりわたり 困義

夏之部

鳥の鳥わきしを四月の 雲卿
 別れを軽くもむしや更衣 春潮子
 白部内甲をくも青く 祖 又衣 調和
 かくも深の橋かたけのき拾 サ 拾 如格
 暮のくもくも立くも 具風
 一輪小甲門をくもく 具風

誰か似く遊むと牡丹の重山 柳車
 情は向ける寺の本魚く子親 因者 文樓
 けしきいふふいふし 郭公 兼豊
 一也 中ふふくけしき 郭公 芽宇
 遍照り子も黒深かふくし 百菴
 都ふもきく山あり 若長多時 我梁
 梅く青月の指と回くき 森羅
 郭公よりみふ字ありし 唱長

江戸屋へきく如車くら時鳥 寸々
 誰か似く遊むと牡丹の重山 千里子
 佛く指くふくし 杜鶴 登夜坊 文尺
 鍼の痛も愈くく若長多時 可容
 うらむるの指を越く郭公 采山
 眼を塔へ讀くくく 蜀兔 麦天
 松魚く 吾妻男の眉間く 羊徳子
 清宮の外樂男やくく 松魚 砂江

波の音びらりびらり 鯉 鱈
社宇 二日の月と探り 小蛇 亀成

かえり鶴舎の
かひ鯉多ゆきれり

まほろ後の寝るやゆらゆらと 白清

まほろの寝るやゆらゆらと 井蛙

まほろの寝るやゆらゆらと 梅郊子

まほろの寝るやゆらゆらと 安土

まほろの寝るやゆらゆらと 大睡

まほろの寝るやゆらゆらと 青屋
まほろの寝るやゆらゆらと 阿誰
まほろの寝るやゆらゆらと 青城
まほろの寝るやゆらゆらと 長精
まほろの寝るやゆらゆらと 水路
まほろの寝るやゆらゆらと 未計
まほろの寝るやゆらゆらと 相州
まほろの寝るやゆらゆらと 万字

中し井しりし物さわしりし田植をよ 書来
あやましりし軒の翫のたれしりし 枕青
しりしもの筋身しりし拍りしりし 兼徳子
わ月雨の障しりし蟹のわしりし音 畔李
まよしりし人ぶさまじりし月雨 米壺
卯酉地わ月雨わしりしおひ合ね 露甘
しりし橋わしりし花さしりしわしりし 露言
郭雪のたよしりしまたわしりし 東山 青洲

縁側くちし物さわしりし月雨 龍眠
あやま鳥の序しりし若葉の卯 紫傘
あやましりしほのあやましりし皮 嵐雪
あやましりし土用と替ふあやましりし 調味
あやましりし個代は冬のあやましりし 不卜
あやましりしれはあやましりし金鏡をた 庭香
あやましりしあやましりし下ゆき蟬のあやましりし 大雪
あやましりしあやましりし蟬のあやましりし 米曉

如蟬のしほ色を楯より
 半里
 の世ふらふ色を堂うか
 松羅
 早合を堂うか
 五月の雨若しこの保るを
 北青
 けし見入の池の草鞋かゆめり
 暇字
 鳴るる暑き時より人太
 諫子
 悠るる漕ぎの舟に澤舟
 糸郁
 多しつとまふ別れ橋渡り
 糸外

帆とる朝の風を其角
 けし浪の白布十端帆
 松意
 川邊の樹と投きくまの行
 不門
 蟬鳴の種あるひやま
 春磨

有感

抑らるる世と道れく坂の中
 拾遺子
 鈴鹿山と少掛の樓を云
 云奴
 常花の影もわらぬ暑の卯
 青却

まてりまきとくかひも松 再馬

首のさか清くくり運見所 百和

小の福をりくかふ浦見かたきり
わらうけりあつこもくはるしりきり

景清くくくくくくくくく 青藍

くくくくくくくくくくくく 米婦

くくくくくくくくくくくく 米舟

穢き物織ききりくくくく 九鳥

貫れくくくくくくくくくく 臺箭

室川の初くくくくくくく 百大

くくくくくくくくくくくく 梁宜

くくくくくくくくくくくく 花雀

菊菊くくくくくくくくく 琵琶江

菊菊くくくくくくくくく 素朴

くくくくくくくくくく

菊菊くくくくくくくくく 且厚

菊菊くくくくくくくくく 錢丁

荷の勢い〜〜も鳩の嘴 八十三 梅戸
 船〜〜橋〜〜落と笑う柳 采芳
 も〜花の心〜〜の根を〜〜み 菜也
 照〜〜の〜〜熊小脚〜〜中の峯 栢造
栗津晴光 連の香や人の影〜〜さ〜〜う〜〜 茂陵
 日及び雨葉は〜〜わ〜〜わ〜〜の〜〜 冲而
 今〜〜〜〜〜のト〜〜〜 枕青
 本町も〜〜表あり〜〜うんと鳥 百宇

何音の〜〜の濁〜〜〜〜〜ト〜〜 光車
 啼〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜の〜〜〜 溪梁
 〇〜〜〜〜〜は神〜〜落る霧〜〜子〜〜 番来
 朝の卯〜〜行のわれ衣押〜〜さ〜〜 万辛
 鬼百合花の色〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ト夏
 雀雀まゝ声曲〜〜由〜〜小舟〜〜 習々
 くら〜〜〜〜〜〜〜〜僧の扇〜〜柳 春川
 千仞の雪駄は犬お喰れ〜〜〜〜 黙斎

古塘こたうのこゝろのこゝろのこゝろのこゝろの
 夕ゆふのゆふのゆふのゆふのゆふの
 小このこのこのこのこの
 回かいのかいのかいのかいのかいの
 流ながのながのながのながのながの
 生なまのなまのなまのなまのなまの
 聖せいのせいのせいのせいのせいの

籠かごの部

年としのとしのとしのとしのとしの
 朝あさのあさのあさのあさのあさの
 川かわのかわのかわのかわのかわの
 日ひのひのひのひのひの
 わわのわのわのわのわの

紙のろく〜竹の錦は母〜糸 汝童子
 やうれちの侍建める凡の芭蕉山 羊黄
 里合わびく〜崩ま〜音 巨洲
 虎さも子秋〜銀河 青屋
 更あ〜人小勝〜の産 森羅
 朝敵の命も〜一 泰鷗
 牛〜〜の川 千里子
 判精〜〜 阿誰

髪結〜〜日の暮〜躍り卵 鏡下
 か〜〜の物〜〜 黙斎
 風を〜〜の西〜 和未
 七〜〜と鳥〜卵 臺蕭
 鶉も〜代衣折〜社〜の板 紫傘
 神鳥〜月〜〜の月色〜 芽山子
 石山秋月 沖向
 折〜〜の親〜〜の月 松羅

猿の目と葉とわらわらふの月 楚洲
 仲人の目と葉とわらわらふの月 雪堂
 移人の目と葉とわらわらふの月 虎文
 心小長と御仲の楳の音 信章
 下とくく其音とわらわらふの月 大雪
 下とくく其音とわらわらふの月 其角
 下とくく其音とわらわらふの月 梅郊子
 願はれしとわらわらふの月 麦天

月夜と葉とわらわらふの月 其風
 心小長と御仲の楳の音 猿舟
 移人の目と葉とわらわらふの月 万年
 心小長と御仲の楳の音 素勇
 下とくく其音とわらわらふの月 百字
 下とくく其音とわらわらふの月 男也
 下とくく其音とわらわらふの月 不卜
 下とくく其音とわらわらふの月 禾舟

日のひかりをひらきて 雲もあつた月のりこ 其本巻 伊十
 産根とあつたやまへ入まらぬ月 半里
 の穂や月見の舟と陸つり 風吟
 雲灯も秋のまねく 龍眠
 稲まよひは 可容
 ニふけり 倫四
 天の月 望宣
 酒 花産

君と集りて

名日や人の鼻をわし鼻色 百太
 雲水風おろし 文睡
 八朝を愛ふ 青城
 深碧 羊婦
 返りけり 青藍
 貝かゝる 柳車
 三田代高尾 角長
 待たふ 拾翠子

うばおれもつらぬく麻路の卯 春度
 ろろろのふ赤楯鈴のやろろろ 青郊
 月今宵鶴もつらぬく麻路の卯 希涼
 宗持よ園ハゆきよろろ 駒込 云奴
 秋を月窟中の白妙土用了 幽山
 芋を昔諸人つらぬく麻路の卯 兼豊
 白くくの農人よあつらぬく麻路の卯 東郷
 うろろ麻路の卯つらぬく麻路の卯 溪梁

休田夕照

暮れし日くぬ田つらぬく麻路の卯 冲向
 夜を今宵鶴もつらぬく麻路の卯 米都
 ろろろのふ赤楯鈴のやろろろ
 粟のしらの粟ハゆきよろろ 米徳子
 葉あはれ麻路の卯つらぬく麻路の卯 翠娥
 心を今宵鶴もつらぬく麻路の卯 我采
 ねろろろの後の月見よろろ 蝦定子
 今年もろろろの麻路ハゆきよろろ 万字

後と知らぬ家か前りよむい
 の瓶ふくむと後と破る卯 畔李
 乳とのまねあふも海一人の夏 白清
 いり雪か前り風路もあつ月 云笑
 花の夏くつん空や一の声 青川
 やちや一年のまもあつけ 雲卿
 谷月か瓶もあつめ 後 習
 大盛の金龍曜く葉の例 露言

浮重く声とくあつてか舞う卯
 赤鞆の夏をあつめく後秋 書来
 舟行る海わくまも遠山松 松意
 ちいさな一葉のまも薄抱 泉舟
 堅田落雁
 まもまもくまもまもの後秋 冲向
 あまのあつめくあつて菴卯 潜魚
 秋のくれ酒あつてあつて 呆曉
 谷月あつめくまもまもの例 葉也

ふれいふあのみづら 鼓堂か 未計
旁の音や宮ささくは 柱の門 壺堂
一輪のまの重うまわ 男 琵琶江

天満宮奉納誄諧千句與行之起言

天う下名さく教さく糸の秋 大漢
くけ後や後合さる山さく 仙夷
まら音のえ在所さく面りの 水路
後さくさくさくさく 雨や露雨 采壺

こ他のゆ偉さくさくの花 甘堂
峰のさく残るわさくわ 兜糸 采勇
魂さく風のさくさく 兼鶴江 春潮子
ふ里れさくさくの種おりさくを深 壽五
さあわに斗さくさく 稚の梢さく 沾徳
ささくさくさくさく 山岩のさく 超波
ふみのけさくさく 糸のさくさく 砂汀
糸の音さくさくさく 糸のさくさく 茂陵

唐より著しく本菴も解紅葉の 諫子
 昔枕の和もささるるにて、 文東
 寶鏡の早前く寺のりら 具厚
 紅葉鏡の思惟も同^カとす^カわ 一鉄
 鐘の部も入るるに裸ひ 琴風
 燈火も入るるに暮るる重なり 長楸

冬之部

くら雪の多葉のくらの眼玉 沾洲
 むゆきささるるに二里塚 芽山
 物雪の海へ青るるに舟 大雪
 くら雪の赤葉の二つとら 淡梁
 寛永の東の比叡の雪はしめ 新栖
 物雪の甲わらぬに白雲 白雲

阿誰
 青屋
 諫子
 貞心
 下野
 吾老
 文樓
 壽
 如口

蝦蟇子
 青洲
 其風
 雲卿
 百宇
 春潮子
 麥天
 百里

道るれは部しとらす後頭巾一 沾徳
清涼のしとらふやも頭巾一 畔李

冬人のうらみ

けりひぢの法の頭巾やちん袋 貞人
對めしと朝思ふよん雪きうけ 文尺
片のぬいしとけしとや雪丸け 琶江
そ枯や身いものさし漢の家 紫傘
炯福の鏡としとらふと何雨 茶壺

みゆりゆ根つとらひわ端女も 米舟
ゆきやゆら人しとらふ人 山貞
くつ雪をぬしと余のぬる声 茶山
あまふもゆめふのしとる落葉外 梁直
山吹の散もあまの日の落葉外 其帳
さくらもくわ朽葉真のふ念山 昌夏
唐崎のりりしとらふ雪う卵 冲尚
髪もくわおつねるさ周のし故 梅郊子

辛崎夜雨

初雪わたりるのしぬしとる 龍賦

くつ雪夜くし入る常風小の
竹を鳴くは彼大復の朔凡怒蹄

すしひまきし
枯屋小賦

晴んとも怒る秋雪の竹折戸 龍賦

うしてふ就鳥の牙折小落葉下 習く

一時雨のうらうらう月の色 友以^今

くねける人も時雨の鳴る音 万年

宮守の徐の具と削る落葉の所 友以^古

霜くくも草履く下駄のお鳥川 在色

くつひもふ儀輪のりうのむかひ 尾久

月雪の口をと用々秋音 書来

頂戴のしるしを眠りしとて
くしひまきし

松風しめされぬ夜の子鳥の卯 来也

小提灯柄く提しる川ららる 呆婦

冬鳥雨ふと理りよ人かしの 松羅

あつらうきもく潜る時雨の 笠雨

けろろりほろく〜紅く〜落葉の
 甲斐園見と〜らふ草と〜を梅 百潭
 ころころ〜首の首〜雪の陽 幸入
 寄〜障子の雪〜〜くたふ柳 曲我
 ぬ〜〜〜大の目赤〜枯柳〜角 采徳子
 時〜〜〜〜〜〜〜馬の 我海木
 四つ〜角〜〜〜〜〜頭巾 宗梅
 夕〜〜〜〜〜〜〜〜〜の〜〜 光車

雪の目黒よ〜〜〜〜〜 行翔
 之辰と〜〜〜〜〜 盤谷
 之辰と〜〜〜〜〜 兼外
比良暮雪
 之の雪結〜〜〜〜〜 冲向
 雪〜〜〜〜〜時雨〜〜〜 森羅
 待〜〜〜〜〜夜ま〜〜〜雪の朝 青城
 之〜〜〜〜〜夜の雪 千里子
 徒の戸〜〜〜〜〜照〜〜〜日枝の雪 柳車

日印のまじりて日教の夜と入る 宝帯子
 炭の本より多かれ 嵐の火の行 幽山
風流の空より鳥の鳴き声も聞こえぬ
伊予の山に花のつぼみもみえぬ
 炬燵の火もいりて入る 秋の草 来道
 石のわらひのまのり ぬれもみ 沓水子
 別しては 葉のぬれもみ 小時雨 万字
 靴けふは 肌ぬれもみ 雷をぬ 銭丁
 鐘のよみ 甘き香もみ 後夜の手 白清

靴ぬれもみ ぬれもみ ぬれもみ 百卷
 風をぬれもみ ぬれもみ ぬれもみ 貞心
 つらつらぬれもみ ぬれもみ ぬれもみ 且厚
 谷のぬれもみ ぬれもみ ぬれもみ 沾古
 けしきぬれもみ ぬれもみ ぬれもみ 采勇
 ぬれもみ ぬれもみ ぬれもみ 水路
 ぬれもみ ぬれもみ ぬれもみ 拾子
 ぬれもみ ぬれもみ ぬれもみ 希凉

村長の徳後ろくろ雪筆 砂汀
 冬川わくく蛇夷の形りの果 羊里
 元くもわきまの寒さいしき 東伴
 子の産着く母の蒲団わくく 魚川
 山盛りの雪の目わくく 木童
 園守の奥庭わくく 千鳥の卵 黙庵
 産屋わくくわくく 試川
 髪もわくくわくく 草履取 米都

印くく印の又わくく 春磨
 ぬわくく印くくわくく 青藍
 針くく寒くく 龜成
 大雪の袖くく火のまわくく 可容
 杉も今朝雪おきくく 百太
 冬結わ六万坪くく 花雀
 寒梅の宮のくく 米晚
 撰くく是のくく 長柄

寒梅の夢おどろくはるかに
 青郊
 ほろりし雪の年う顔の志は
 徳元
 余りし冷の市車
 常仙
 返るる女はあはれ
 松陰

江都俳諧宗匠

梅既し乾鞋の花咲かりり 存義
 山家宗と名目入りては平 有佐
 曲も流ししは目附役 平砂
 杜もらん雪真かきり
 花のちし月あはれはみ六日 米仲

海を標馬と帆を舟と日紅の那 祇吐
 今も〜花の体も〜買明
 志馬の行ふわ〜楼川
 雲の峰 風お抱つ〜渭北
 蚊や〜火の曲り〜湖十
 雷の火の燭つ〜牡丹小 旨原
 牡丹見の又我〜紀逸
 春の親の〜再賀

伊豆三嶋鴉の小櫓と〜 珠来

東海寺〜

禅の仮名〜萬立
 〜〜〜超雪
 や〜秀億
 青〜吉門
 分別の〜嘉延
 袂袂や月〜栖雀

けくくくくく柳のくくく天何 書永
 少る夜や寝くくくくく 鶏口
 あつら切火もきくくく 柳尾
 温泉の海るるくくく霜くくく 庭臺
 只ゆやぐ代りくくく親の息 由林
 川の雪村も屋くくく霜可南 清泉
 更ゆくくく海とくくくく雪の音 張籬
 治村も佛おりくくくくく命 田社

うきくくく

寄れいあれくくく夜くくくく老の波 圖大
 けくくくくくくくくくくく 海如
 人くくくくくくくくくくく 露牙

先師六益居士卷句畧藻
増ハ乾ハ十里山ガリ今朝霞
薬子ヤウラハ乾ハ膝巻盤
きハぬ牛ハ冷ハミハ宿ハ去
見ハ目と左ハミハハ娘来摘
鼻ハ知ハ虎ハ中ハ将梅ハこれ
病ハ冷ハ行ハリハ日取ハ花ハ山

木兔の月おのころおのころ

樊噲賛

きよみ奈麻くもつ母之勇
大家の頃成わゆも暑く亦
き良也穴のいふれを鎌倉路
わくまおつる蛙の暑くも
君子必慎其獨
もつれも人おのころの星

くけ扇駭河遠州甲斐信濃
朝のむらさきいふ人のあはれ
けし合や望み床崩と笑ふ
しとせ日露し
葉ふしと今宵と日露天河
櫻りし霞のしとさけの月
名月も花のうらみと
名月も今宵の馬の麻

よのちと海とあしと葉の花
しとせ日露し
露のしと親の昔と菊の酒
しとせ日露し
しとせ日露し

校訂

拾遺

存義

采仲

渭北

再賀

萬立

秀億

嘉廷

由林

圖大

露牙

補闕

古

友以

紫傘

壽來

百字

寶曆六丙子春

春來氏俳諧引

川中
表外

甚矣今之俳諧之行于世也。上自公侯相將，下至富商豪民及屠子乞丐之微，靡然向風。聞秀尼姑紅女唱妓，往成家闈門，簧鼓一世者，第葦葦出，比諸雅頌，得其警策也。視為靈蛇夜光，家傳戶誦，亡

足而千里。置郵不亭。古之所未聞。好尚移
人。其如斯邪。聞之。副墨之子。西土之有俳諧。
雜技之類。爾。東方國風之什。有俳諧歌。體
制。衣大有。逕庭云。迂矣。芙蓉子之不知時好
也。殆乎亡人情。其於俳諧。曾乎亡知。何知
爾。是非亦但不解事。子雲加以老老。昧者

之固矣。時師春來氏。以斯技鳴東都。曰。今之
俳諧。非古。龍於彫。虎於繡。假令腹笥。吻筆
泉涌之務。舍古尚今。不可從矣。毋乃吾力能復
古乎。於是杜門謝客。撰古上梓。因門生博多
者。謁余一言。遂援筆而成引。授博多。居亡何。
博多為異物。且所授稿。烏有。頃致書請復

予。曰。吁。春來不諷於智者。諷昧者。予已悲
博多之不造。且愛春來氏之好古。乃塗抹數
語。贈之。亦但塞其責耳。去。年。之。十。有。一。月
書芙蓉書樓寒燈下。

芙蓉道人



寶曆六年丙子春

東都彫工

日本橋南三町目

吉田魚川

同 木童

江都書肆

本町三町目

西村源六

堀河錦上町

西村市郎右衛門

京都書坊



